学校自慢

地域コミュニティの中にある小学校

船橋市立高根台第三小学校長　飯島（いいじま）　辰治（たつじ）

1　はじめに

本校は市の中部から北部に広がる下総台地に位置する今年で創立45年目を迎える学校である。地域の特色として，江戸時代は幕府直轄の馬の放牧場の一部で，人の出入り口のあった所の名残として現在の「高根木戸」という地名が残っている。戦後は開拓が行われ，昭和36年に高根公団ができ急速に発展し，今日に至る。

平成28年度は児童数387名，特支4学級を含む16学級でスタートした。

2　学校自慢

最も自慢したいことは，児童一人一人がかけがえのないオンリーワンであること。「学校→楽校」を合い言葉に学校教育目標の「やりぬく子」の実現を目指して，教職員と児童が切磋琢磨（せっさたくま）している「学び舎」である。

⑴図書館を活用した学びの充実

平成23年度には，市指定図書館活用教育公開研究会を実施している。

読書習慣を幼い時から身に付けることは，国語力の向上に結び付くばかりか，生涯を通じて「生きる力」を支える基礎となることが期待できる。

⑵土に親しみ，植物の生長から培う情操教育

校舎と校庭の間に学年園があり，四季折々の草花や多種多様な野菜を栽培している。冬の落ち葉掃きで集めた枯れ葉から腐葉土をつくり，米ぬかと混ぜ合わせながら，土づくりを行っているため，トマトやキュウリ，ダイコンなどは「店先で出回っている物と変わらない。」と好評である。一人一鉢と併せて，集合住宅から登校する子どもたちが多い本校では，必要不可欠な自然体験学習の一環となっている。

⑶心を育む地域の教育力

本校は，新京成線高根台駅前の基幹公民館及び小図書館，児童ホーム，市庁舎の出先機関である出張所，保育所，銀行などの公共機関が集約的にある地域コミュニティの充実した環境の中にある。毎年11月には，３年生全員が高根台公民館にて登録団体の皆様から，御指導をいただきながらの「サークル体験学習」が，週１回（２時間）×４週間行われている。子どもたちにとって，蕎麦（そば）打ち・フラダンス・詩吟・茶道・大正琴・和太鼓など，生涯学習の一端を味わう絶好の機会となっている。

3　おわりに

地域の様々な方面から支援してくれる方々の温かな気持ちを大切にして，全教職員の日々の努力で進化し続ける「高三小」を創っていく覚悟である。

提言

情報化社会で身に付けるべきこと

イオンモール㈱イオンモール幕張新都心　ゼネラルマネージャー　小野（おの）　大輔（だいすけ）

弊社はショッピングモールを運営している会社です。日々お店というリアルな場に身を置きながら，御来店される様々なお客さまと接していると，この数年間で，携帯端末，わけてもスマートフォンやタブレットを持つことが急速に一般化したと感じています。例えば，私共に寄せられる御意見・御要望も「Free Wi-Fi はあるのか？」「Wi-Fi のつながりを良くしてほしい」「スマートフォンの充電場所を増やしてほしい」等々，御来店の際でも携帯端末の利用を前提にした内容が，目に見えて増えています。携帯端末の拾得物も多く，お一人一台の時代というのが実感です。

パソコンに近しい機能をもち，かつ体感的に気軽に操作できる機器がポケットサイズで携帯できるわけですから，利便性の高さは疑いようもなく，利用者が右肩上がりに増加，また大人だけでなく，子どもも含めた若年層まで拡大しているのも当然の成り行きだと思います。

総務省の統計によると，スマートフォンは平成26年時点で，全世帯の64.7%に普及しており，世帯主の年齢別では，20歳代，30歳代で90%超，40歳代，50歳代でも70%を超える普及率と発表されていますので，現時点では更にパーセンテージが増えていると思います。今の小学生以下の子どもは，生まれた時にはスマートフォンひいてはインターネットが身近にある世代だと思います。私共のモールに，小学生が社会科見学でお見えになることがありますが，児童の方から「来る前にネットで調べてきました」という声をごく当たり前のように耳にし，水道や電気と同じぐらいにインターネットがインフラ化していることを実感します。

しかしながら，昨今の携帯端末の機能性やインターネットの利便性の高さを認識しながらも，それらと子どもとの関わり方という点について，一抹の不安を覚える時があります。それは，本来子どもたちが育てるべき，もしくは鍛えるべき大切な領域と，それに費やすべき時間に対して障壁となっているのではないかということです。「ながらスマホ」なる言葉が一般的になりつつあるように，携帯端末やインターネット及びそこから派生し発展してきたSNS（ソーシャルネットワークサービス）によるコミュニケーションへの依存が，常態化し，陥穽（かんせい）となっているように思います。

この依存という点については，既に何年も前から警鐘が鳴らされてきたことだと思いますが，それは変わることなく，年を追うごとにより顕著になってきたと感じています。ある広告代理店の調査によると，テレビやラジオ，新聞，雑誌，パソコンに携帯・スマートフォンを含めたメディアの中で，直近10年間，利用者の接触時間が伸び続けているのは唯一携帯・スマートフォンであり，時間にして10年前の10倍に迫ろうかという伸張ぶりです。「時間を追うごとに情報が蓄積されるインターネットを通じて，新しい，気になる情報を気軽に，

いつでも得られる」こと，SNSの発達により，直接の電話に代わる，気軽でタイムリーなコミュニケーション（LINE，twitter等）が可能になったことがその主要因だと思います。

ところで，インターネットや携帯端末のような便利なツールがそもそも存在しない時代もありました。しかし，情報の深掘りという点で，何もできなかったのかというとそのようなことはありませんでした。私自身を振り返ってみると，子どもの頃は分からないことを先生や周囲の大人に聞く，辞書を引いたり，図書館に行って調べる，そして，年を重ねるごとに新聞やテレビのニュース番組に興味を抱くようになる，一般新聞紙を読んでいたのが，就職後は経済紙や関連情報誌を読むようになり（これについては会社の上司からのサジェッションもありましたが），社会で働く上での情報収集の仕方に視点が向く，といったように段階的な情報高度化の流れについていこうとする姿勢を身に付け，それが考える力の育成につながっていったのではないかと思います。また，新聞や書籍といった情報源を探索する中で，その周辺に存在する情報にも接点ができ，プラスαの習得につながる場合もありました。

今昔，新旧の違いを考察すると，一つ目の違いは，情報にたどり着くプロセス（過程）だと思います。現在主流となっている，インターネット上で検索を行い，情報を探すという方法（今・新）は極めて短時間かつ簡易に目的を達成できます。効率的であることは疑問の余地がありません。一方，様々な情報源にアプローチし解を紡ぎ出していく後者（昔・旧）は時間も掛かり，費用が掛かる場合もあります。当時はその方法しかなかったということも事実ですが，そうしたプロセスを経験することは，答えを見つけるための道筋やスケジュールを思考し，想像する力を養うことと密接にひもづいていたのだと考えます。

二つ目は上述のプロセスにおいて生じる対人コミュニケーションの量です。現在は，フェイスツーフェイス・コミュニケーションであれば当然生じるはずの，相手の声や表情から何かを感じ取ったり，それに反応して慮る力，もしくは敬意の念等，そういったものを育むシーンが少なからず減少しているのではないかと考えます。例を挙げると，子どもが友達と直接連絡が取り合える現在は，効率的になったという捉え方もできますが，相手の親を介していた時代と比較すると，子どもが大人と対話するシーンが間違いなく減ったという見方もできます。弊社では，地域コミュニティの場という考えの下，先述の小学校の社会科見学の受入れや，幼稚園・保育園園児による歌声発表会，高校生の文化活動の発表会（教育産業フェア等）の開催の場として，イベントスペースを御提供することが多々あります。拝見すると，リアルな場で，共に時間を過ごすという体験から育まれる人々のコミュニケーションの大切さを実感させられます。

生活や技術の変化というものはいつの時代にもありますが，子どもがやがて成人し，社会に進出するという流れは変わりません。一旦，社会に出ると，様々な人との接点が生じます。これはリアルです。その環境で，自立と自律の意識と，主観だけではなく客観的に物事をみる視野をもつためには，子どもの頃から思考力や想像力を養い，そこから培われるコミュニケーション力を実装することが大切であり，身の助けになります。ツールはツールでしかなく，依拠すべきは「自分という器」であるということを、私達「大人」は子どもたちに対して，自身の経験も含め，伝えていく責務があると考えます。